
被虐の鬼才メイジ

出雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

被虐の鬼才メイジ

【Nコード】

N4397Z

【作者名】

出雲

【あらすじ】

二度目の転生先はゼロ魔の世界
一度は頂点に君臨した者が。。。
持ち前の能力を使って切り抜けるか？
それとも豆腐メンタルチートは潰されてしまうのか？

プロローグ（前書き）

敢えて何も言いません
序盤は暗い話です

ブローグ

？「あ…ありのまま　今　起こった事を話すぜ！

『ピカツと光ったと思ったらFFのタイタンのように遅しいじいさんの居る真っ白な空間に居た』

な…　何を言ってるのかわからねーと思うが
おれも　何が起こったのかわからなかった…
頭がどうにかなりそうだった…

催眠術だとか超スピードだとか

そんなチャチなもんじゃあ　断じてねえ
もつと恐ろしいものの　片鱗を味わったぜ…」

神side

神「そうか。吾輩はネ申である。名前は沢山ある。君は死んだのだ」

「ゑ　れれれ冷静になれ」

神「冷静になるのは君だよ　君は吾輩が殺した。君を生かしておくのを危険と判断した。よって違う世界に転生とする。」

ほんととは部下のミスですサーセン

「」

目の前の御霊は心当たりがあるのか絶句してしまった。

?side

思い出せない…自分の名前…家族…友人…同僚
俺は医師だった。

これはちゃんと覚えてる。
知識もちやんとある。

だが人間関係は全て記憶から消えていた。

まずは冷静になって状況を把握しよう。

く？整理中く

「君には転生するにあたり、特別な才能を与えよう。努力次第で無限に伸びる能力、強靱な精神力、超精密妄想能力。面倒なので記憶も持ち越しとする。いつか吾輩をも超えるやもしれんな。カッカッ力」

素晴らしい神様です。私は貴方を信仰しましょうかな

「ふむ、ならばこのありがたい壺を100万円でどうだ？」

「エセ新興宗教みたいな事はやめてください。」

「カッカッカ面白いのう。ではいてらくノシ」

これが全ての発端だった。

私が生を受けた世界は

ドラゴンクエストの世界のようだった。

「貴方の名はピサロです」

見たところ魔界つまり…私は…あのピサロだろう。

ラスボスか

勇者が怖すぎる

私はその後、ピサロとして生き
ロザリーに恋し

勇者に討たれて死んだ

進化の秘宝を極めて

そのままの姿でパワーアップを図り、全力のエスターク先輩並みにはなったが

倒しても倒してもゾンビのようにやってくる勇者になす術は無かった。

そして我が人生は終わり

―再び神様ルーム

神「ういゝご苦労さま」

ピ「あるえええ！？神様変わってる！」

神「前の神は君をミスで殺したから責任取って首になりました。これからは北●大学の神ことロベルトがここの担当です。」

ピ「ああゝ細菌学の開祖様…でしたっけ？パスツールのライバルだったという。」

神「そうじゃ、君をまた転生させる。能力記憶持ち越した。」

ピ「おう、わかった。助かるよ…因みにどんな世界なのですか？」

神「これだ」

神が手に持つてる漫画『ゼロの使い魔』

ピ「ピサロに転生する前の世界で高校生の時にアニメを見ていたな

あ…1000年前くらいだな。記憶訓練してたら絶対記憶的なものが身についたでござる。」

「ならば話が早い よろしいならば転生だ。容姿もそのままだから安心せい！」

暖かい光が包み込むと同時にピサロは意識を手放した。

プロローグ（後書き）

やっ
ちまっ
たぜ

第一章↳第1話大貴族の子（前書き）

望まれない子の誕生です

第一章 第1話大貴族の子

「おめでとうございます！元氣な女の子ですよ」

なんか体がベタベタする…この感覚はやっぱり慣れん

タオルで拭かれ、包まれたようだ。

暖かい…

「我が子をよく見せてもらいたい。」

「は、はい！只今！」

親は貴族か…良かった良かった

親バカだと嬉しいぜ

「ん？…これは…尻尾に…獣耳？これは…なんという事だ…大々的に発表したのに隠すわけにはいかぬが…暫く屋敷に閉じこめておかねば。」

9

今オヤジ何といった？

明らか人間じゃないな…私は

殺されはしないのは

安心した。

「ああ…なんという事でしょう…我が子が…悪夢だわ…」

父ーレイヴン・ド・マルセイユ視点

待ち望んだ我が子

期待に胸を膨らませ

始祖ブリミルに祈りを捧げながら妻の手を握る

そして遂に我が子が生まれた。

最初は天にも昇る気持ちだった。

だが私は地獄の底にたたき落とされた

我が子は耳が普通の位置に無く、犬のような耳が。おまけに尻尾がついていた。

こんなのがバレては

マルセイユ家の威信が地に落ちる

それだけは避けたい

殺すのもあんなに大見得切った手前不可能だ。

地下室に軟禁して生かしておく。

社交界には帽子を被せていけば良いだろう

ふふふ… あッハハハハ

出来損ないめ…

第一章↳第1話大貴族の子（後書き）

主人公詳細

名前：フィオーレ・ピサロ・マルセイユ性別：女

ガリア貴族 マルセイユ大公家の長女

前世はピサロでチート能力持ちで記憶引き継ぎといったチート具合だが

ピサロ様は優しすぎた

容姿は、サラサラな銀髪に鳶色の瞳。

反則のふつくしさ

尻尾と狐耳があり、そのおかげで両親に良く思われていない。

豆腐メンタル

第二話　弟誕生さらば平穩（前書き）

フィオーレ視点で進んでいきます

第二話　弟誕生さらば平穩

私―フィオーレ・ピサロ・マルセイユは今年で5歳になりました。

見事にチートでしたとも、ええ

父や母も優しくしてくれますし。

いつも黒いハットを被ってます。

もうローブも買ってもらいましたので着ています。

3歳のころ魔法を習うように言われました。

師はとらずに父が教えてくれました。

初日で土・水はスクウェアに　火・風は……まあチート魔法あるから良いか。

要するに全く使えなかったです。

父が忌々しげに私を見たような気がするけど
気のせいでしょう。

900年くらい前…日本国民だった頃は自衛隊の医官で内科医したから臨床はお手のものです。

治癒が得意になりました！

そんなある日私に弟―シャルル・ジークフリート・マルセイユができました。

とおさまとかあさまは大層お喜びになられた。

普通の子でしかも男

私に魔法の才能があったためか、その子にも凄い期待

私は弟が出来たのが何故か嬉しくて

少し夜更かししたが寝た

私の扱いはこの日を境に急変した。

第二話　弟誕生さらば平穩（後書き）

父

レイヴン・ド・マルセイユ

プライドが相当高く、名誉を一番に欲しがる。

子爵の家だったマルセイユ家を一代で大公家までにさせた。

ジョゼフの親友であり、優秀だが足元を掬われることもしばしば

平民には人気がある

カリスマだだ漏れイケメンリア充野郎

土・風のスクウェア

火のトライアングル

水のドット

母

エレーゼ・オブ・オックスフォード・マルセイユ

アルビオンのオックスフォード公爵家の次女だったが、ガリアのマルセイユ家に嫁ぐ　レイヴン一直線でベタ惚れしている。

水のスクウェア

火・土・風のトライアングル

両親も規格外なのです

弟

アンリ・ジークフリート・マルセイユ

あまりというか全くフィオーレに似ていない

普通の顔

普通の普通

だがチェスは強い
ジヨゼフを手こずらせる程の腕前
魔法は
火水土…×
風…ドット
フィオーレの実力を妬む。

第三話↳被虐のフィオーレ（前書き）

前の後書きの訂正

アンリ↓シャルル

ミスですorz

第三話　被虐のフィオーレ

「ん……う……ゑ？」

朝余りにも寒かったので起きたら、私は地下牢に閉じ込められていた。

鍊金したであろう鉄の首輪が着けられていて、ぶつとい且つ重い鎖で繋がれていた。

魔法はチートだが、身体能力は普通の少女なのだ。

前世みたいな怪力は無い

牢の中には

トイレ、餌皿、犬小屋があった。

布団など無い

私は年のために魔法が使えるか確かめた

鍊金でゴーレムを創ろうとした―が

「あれ？あれ！？魔法が…使えない」

何度も試すが使えなかった。

「メラ」

違う魔法も試してみたが無理だった。

「え！？何で！？何で使えない！？」

フィオーレは珍しく焦った

貴族ニート生活で暢気な性格になっていたが、自分は魔法と能力が無ければチートでも何でもない。

ただの5歳の少女なのだ。

そう考えると、途端に怖くなった

「フィオーレ…」

「とおさま！？助けて！此処から出して！！」

「貴様は私たちの子ではない」

「そんな…どうして…」

「どうしてだと？教えてやろう。貴様の存在が由緒正しきマルセイ

ユ家にとって邪魔なんだよ！！亜人がまともな生活送れただけでも感謝しな。魔法は首輪がある限り使えんからな！！クソ女狐めが！！」

「あ…あ…嫌アアあアア！あ…っ…なん…で…」

レイヴンは牢の中にゴーレムを作り、フィオーレを殴り倒した。

「う…痛い…なんで…なんで…痛いよ…」

「忌々しい…」

レイヴンは憎々しげに倒れているフィオーレを睨みつけると、階段を上がっていった。

フィオーレには分からなかった。

今まで優しくかった両親が何でこんな事をするのか分からなかった――理解したくなかった

「…」

痛みが引いてくると、犬小屋の中の布団にくるまって泣いた自分のふさふさもつふもふな尻尾が憎かった。

心なしか耳が垂れていた。

前世が魔王的なものでも今は魔法がチートな5歳児記憶が残ってても

ニート生活で幼児退行

してたフィオーレは、ただの 5歳児だった。

魔法が使えればチートだが封じられれば手も足も出ない。

フィオーレの地獄はまだ始まったばかりだった――

第三話　被虐のフィオーレ（後書き）

フィオーレはニート生活でふぬけの豆腐メンタルになりました。
容姿はタバサの髪が銀で、目が赤っぽくて
ふさふさもつふもふの白い尻尾に犬耳です。
碌に栄養が取れてなく、ちびっ子です。

首輪取ればチートですが…

第4話〜弟のペシ〜（前書き）

少し急ぎます

第4話　弟のペット

私フィオーレは12歳になりました…

正直言ってもう生きるの疲れました…

あ、鬼畜親父が来ました…

鬱です…もう嫌だ

「おい、フィオーレ…喜べ…一度外に出してやる」

あの鬼畜野郎の事です…どうせ酷い目に遭わされるんだ…

ガチャ

やめて…来ないで

「立て！」

「う…っ…あ…」

鎖を引っ張られたら何故か首輪が締まりました

言うことを聞いて立ち上がると緩まりました

私は黙って従うしか無いみたいです…

私が連れて来られた部屋には5歳くらいの男の子が居ました。

「おお…シャルル、ペットを連れてきたぞ。好きに扱うが良い」

「やったー！とおさま大好き！」

普通の家族

見ていたら苦しくなりました。

私はあれから七年…毎日虐待され続けました。

私が喘息だと分かると、魔法で家中のハウスダストを地下に送って

きました。発作を起こし、死にそうになると水の秘薬で無理矢理立ち直らされます。ご飯は無いです…

前世で捨食の法を使ってなかったら餓死してました。

何故死なないか鬼畜は考えてましたが、私は悪魔の子だという変な結論にたどり着いたようです。毎日痣だらけになるまで殴られ水の秘薬で治される。

私は壊れかけていました。

私が考えている間に話が終わったようすでちびっ子に鎖を引かれます。私は…黙って従うしか…「おい犬！」

「狐です…」

「おい狐！」

こいつ…馬鹿だな？

あ、あれ？鎖を外した？「お前は首輪だけあれば安全だとおさまが言っていた。」

「あ、うっ！？…な、何をなさるのですか！」

ちびっ子は突然蠅たたきのようなもので思い切り叩いてきた。

「うるさい犬、とおさまが叩くと喜ぶって言った」

ちびっ子に何吹き込んでんだよ…別に喜ばないよ…

パン！パン！パン！

「や、やめてください！痛いです！」

「口答えするな！僕は偉いんだぞー！」

「……」

私がボロボロになるまでこれは続けました
もう声をあげる気力すらありません。

何かを無理矢理飲まされました
傷が治っていきます。

水の秘薬でしょう…

それにしてもこんなに水の秘薬を用意できるとは…この家の金は底
無しですか

「ひゃあ！？ど、どこさわって…」

「尻尾だが何か？もつふもふだな」

突然尻尾をさわってきました。

尻尾は弱いんですね…

「や、やめて…ください」

「だが断る」

「うう…っ」

私は必死で耐えました

無い胸を触られたりもしました。

その度に絶壁と馬鹿にされ…

別に良いじゃないですか…どうでも良いじゃないですか…

夜中には叩き起こされて鬼畜野郎に虐待されます。

昼間はちびっ子に虐められます

私はもう壊れていました。

感情も無くなり、何の反応もしなくなりました。そんな私に飽きた

のか、私は13歳の春

トリステイン魔法学院に留学になりました。

体裁は留学ですが要するに厄介払いです。首輪を外してもらえまし
た…

殺してやりたい…だけど…怖くてできなかった

前世で人間なんて何も思わず殺してきたけど今は怖かった。

私はいつも帽子を外さないと誓いました。

外したらまた…虐められます…

それは嫌です…

やっとあの二人から解放されます。

馬車に乗り込むと、私はトリスティンへ向かいました。

第4話〜弟のペット〜（後書き）

フィオーレは青いフレームの眼鏡を買いました

第五話　入学と束の間の平穏（前書き）

キュルケとタバサ登場

第五話　入学と束の間の平穩

「おい、到着だ。起きろ」

「パシッ！」

「っ！？」

護衛に文字通り叩き起こされた私は魔法で荷物を浮かせ、寮まで行った

寮の前は人混みが出来ていて怖かった

夕方まで待ち、人がまばらになった頃に部屋まで行った。

私の杖はレイピアみたいな形にしてある。

隣人の名前をチェックしておく。

タバサとツエルプストーという人らしい。

怖い人じゃないと良いな…

荷物の整理を済ませると、暇だし図書館に行こうと部屋を出る。

私はこの学院にはただのピサロとして入学した。明日は入学式らしい。

なんか代表挨拶するみたい。

唯一のスクウェアだとか…

ドアを開けると隣人も出てきた。

「・・・色違い」

それが彼女の第一声だった

確かに似ていた

というか髪の色以外では眼鏡の色と杖と帽子しか見分けられるものが無い

二人とも本を持っていた。

瓜二つだった。

「・・・名前：タバサ」

手を差し出してきた

「…ピサロ」

私は手を握った

その時もう一人の隣人が出てきた。

「双子？」

キュルケは混乱していた色違いでそっくりなのが握手をしている。

2人は隣人らしい

片方は黒い帽子を被っていた

「…違う」

タバサが言っているとキュルケは面白いものを見つけたという目をした。

「私はゲルマニアのキュルケ・フォン ツェルプストー。微熱のキュルケよ。宜しく」

キュルケは微笑みながら手を出してきた。

「…タバサ」

先にタバサが握り返した「…ピサロ」

次にフィオーレが握り返した

二人とも偽名つぽいわ…「二人はどこ出身なの？」「…ガリア」

あ、被った

にしても本当にそっくり…

二人を無理矢理部屋に連れ込もうとする

「…図書館」

タバサは抵抗したが、ピサロはされるがままにされている。

ピサロが悲しげな表情を浮かべてたのが気になったがタバサを抑える。

幼い二人はキュルケの力にかなわずに引きずられていった。

第五話 入学と束の間の平穩 (後書き)

ぬるふあ

第6話／入学式前日（前書き）

ここのタバサは天才故に少し考えが飛んでいます。

第6話／入学式前日

キウルケの部屋に連れ込まれたピサロとタバサは突然の事に困惑していた。

「まあ親睦を深めましょう。偶然会ったのも何かの縁です。自己紹介の続きでもしましょう?」

キウルケがそう言うのとタバサもピサロも無反応だった。

「私は火のトライアングルよ。年は17、宜しく。」

キウルケが微笑みながら言うと、若干ピサロの雰囲気が和らいだような気がした。

「…風のトライアングル」

タバサが言うと、ピサロに視線が集まる

「土・水のスクウェア…13歳」

「彖!?!」

キウルケは露骨に驚いて、タバサはピサロを凝視した。

「その年でスクウェアって…」 「……凄い」

当の本人は無表情で固まっている。

「改めて宜しく。仲良くしましょう?」

「…コクン」

「はい」

タバサが頷き、ピサロが返事をする。

「そつえば…室内なんだし帽子とりなよ」

「え…あ…その…」

帽子を両手で抑えて部屋の隅に座り込んでしまった。

酷く怯えているように見える。

心なしか震えているような…

ピサロは恐れていた。

折角…初めて仲良くなれそうだったのに
耳を見られたら絶対に虐められる

どうすれば良いか分からずに私は丸まった。

キュルケとタバサは目を合わせると、ピサロに近付いてみた。

ピサロはまるで怪物を見るような目で二人を見た

二人は軽くシヨックを受けたが、何故これほど人を恐れるのか氣になった。

ハゲなのか？ そうなのか？

二人は同じことを考えていた。

「・・・ハゲてても大丈夫」

ゲツ…タバサストレートすぎる。

「…ち、違う」

ピサロも流石にこれは否定した。

「じゃあ何なの？ 親友の私たちにも言えないの？ 何であろうと変わらないから大丈夫。」

キュルケがしゃがんで微笑みながらピサロに言った

「・・・会ったばかり」

タバサが冷静に突っ込んだが、キュルケはスルーした。「ほ、本当に？」

ピサロが帽子を押さえながら涙目上目遣いで2人を見る。

ーゴフツ

燃えたわ…いえ、萌えた

あの無愛想なこの子がねえ…

「本当よ」

キュルケは精一杯優しそうに答えた。

この子…使える

仲良くなっておくべき

「…コケン」

タバサも頷いた

ピサロは2人を信用して、帽子を恐る恐る取った
そこにあつたのは…

垂れた獣耳だった。

ピサロは目を瞑って体を強ばらせた。

「エ？この子…そういう事だったの…」

「・・・かわいい」

キュルケは全てを理解した。慈しむような…哀れむような視線をピサロに向けた

タバサは決めた

この生き物を自分のものにすると

毎日もふもふして暮らそうと

いつその事妹にしてみよう。

瓜二つだし…強いし…

「この学院に居れば大丈夫よ。もう怖がらなくて大丈夫。辛かったわね？よく耐えたわ。もう大丈夫だから。」

キュルケはピサロを抱きしめながら頭を撫でた。

「……グスッ」

ピサロは泣いていた

しっかりとキュルケに抱きついて暫く泣いていた

「ありがと…キュルケさん」

「良いのよ、友達だから」キュルケはピサロの頭を撫でながら言った

頭を撫でられてピサロは気持ちよさそうに目を細めている。

「・・・私空気」

タバサはどう接して良いか分からなかった。

自分の対人スキルの無さには絶望した。

まずは話しかけてみよう…

キュルケから取らないと

「・・・キュルケずるい」

「ん？タバサ？そういう事ね。そういう事に違いないわ」

「・・・話はちゃんと聞くべき」

タバサはキュルケに抱き寄せられて頭を撫でられていた。

キュルケが勘違いしたただけなのだが、悪い気はしなかった。

ピサロは泣き止むと、再び帽子を被った。

「この事は誰にも言わないでください…お願いします。」

「わかった、約束するよ」「…コクン」

この日は三人で図書館に行ったりピサロのスピーチの原稿を考えた
りした。

タバサの希望で、ピサロはタバサと一緒に寝る事になった。

―タバサの部屋

二人はタバサの部屋で黙々と本を読んでいた。

突然タバサが近寄ってきたと思ったら手際よく、ピサロに革製の首
輪を取り付け帽子を取り上げた。

「ふえ！？…や、やめてください…お願いします…」

「・・・害は無い…かわいい」

首輪には『タバサ』と

書いてあった。

「・・・ピサロは私のもの・・・もう寝る」

タバサとピサロは寝間着に着替え、ベッドに潜り込んだ。

「・・・尻尾・・・もふもふ」

「はうっ…尻尾は駄目です…」

タバサが尻尾をもふもふしだす。

柔らかい布団に感動していたが、尻尾をもふもふされて寝るどころではなかった。

全身がムズムズした。

タバサは残念そうな顔をするが、止めてくれた

「・・・おやすみ」

ピサロはいつの間にか寝てしまったようだ。

「…ぐ…あ…やめて…ください…何で…何で…」

突然ピサロがうなされ始めた。

彼女も私みたいに悪夢を見るのだろうか…

私はピサロを抱きしめた。

いつしか私も眠りに落ちた

第6話／入学式前日（後書き）

あばばば

私なんかの作品を読んでいただきありがとうございます。
稚拙な文章ですが、精進したいと思います。

因みに私は虐待やいじめは絶対に許しません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4397z/>

被虐の鬼オメイジ

2011年12月15日17時49分発行